

フープ

～ 女性建築士の輪 ～

奈良県建築士会 女性委員会

2019 年 秋号

第 99 号



岩倉具視幽棲旧宅

目 次

- | | | |
|---|-------------|-------|
| ■ 社会福祉法人 奈良県社会福祉協議会 主催
「第 8 回 なら小地域福祉活動サミット 2019」に参加して | 寺岡 春恵 | P 1-3 |
| ■ 第 29 回全国女性建築士連絡協議会(東京) 報告 | 庄田 尚代 | P 3-4 |
| ■ 職人さんに聴く!! — 瓦葺き職人 北浦 佳博 氏 | (聴き手) 庄田 尚代 | P 5-6 |
| ■ がんこ「平野郷屋敷」(旧辻元家住宅)と重要文化財奥田家住宅 見学会 | 武市 啓子 | P 7 |
| ■ 私の好きな 木のある風景 | 瓶割 環 | P 8 |
| ■ 編集者が選ぶフォトジェニックスポット | | P 9 |
| ■ 今後の事業予定・フープ第 100 号記念号のお知らせ | | P 9 |

社会福祉法人 奈良県社会福祉協議会 主催
「第8回 なら小地域福祉活動サミット 2019」
に参加して

福祉まちづくり部会 寺岡 春恵

8月31日、奈良県社会福祉総合センターにて行われた、社会福祉法人 奈良県社会福祉協議会主催の「第8回 なら小地域福祉活動サミット 2019」に参加いたしました。



このサミットは、今年で8回目を迎え、顔の見える身近な地域(小地域)で住民同士が力を合わせ支え合う福祉の活動に焦点をあて、このような活動をしている方々に、その取り組みをご報告いただき、活動を広げることを目的として開催されています。



今年のテーマは「みんなでつくる地域」ということで、千葉大学大学院教授、木下 勇先生の「みんなでつくる、やさしいまち」と題した基調講演がありました。その後、子どもから高齢者まで、多様な視点での各地域の取り組みについて取り上げる分科会が企画されていました。

木下先生は、現在、千葉大学大学院園芸学研究科の教授で地域計画の工学博士。東京工業大学で、建築を学んでおられたようで、福祉のイベントですが、改めて福祉と建築の関係の深さを実感いたしました。

木下先生は、ワークショップを活用した住民参加、子ども参画のまちづくりを進めておられ、日本ユニセフ協会子どもにやさしいまちづくり事業委員会委員長も務められています。

「子どもにやさしいまちづくり事業」とは、1996年ハビタットII（国連人間居住会議）において提唱され、発足した事業で、ユニセフが推進している活動です。

「子どもが幸せであるかどうか、社会が健全で政治がうまくいっているかどうかの証である」＝子どもにやさしいまちはすべての人にやさしい（ユネスコ「こども都市」の標語）の言葉を先生よりご紹介いただきました。子どもの為という目線でまちづくりを考えていくと、結果、すべての人にとって過ごしやすいまちができていくのでは？ということです。

我々は、今、福祉というと、まずは、高齢者の為、障がい者の為の・・・と考えがちですが、この言葉を聞いた時、生活弱者である「子ども」という視点も考えていく必要性を感じました。

ご講演の中で、木下先生は、1992年のリオ国連サミットで当時12歳のセヴァン・スズキさんがスピーチされた内容についてお話をされました。

「大人のみなさん、どうやって直すのか分からないものを、壊し続けるのはもうやめてください。」という演説をされたそうです。現在でも環境活動家として活躍されている彼女のスピーチは、まだ、子どもだった彼女が全世界に感動を与え、世界中の人たちに環境の危機を訴えるきっかけとなったようです。

最近では、グレタさんの活動も有名ですが、このように子どもたちの目は、あらゆる問題を率直に見極める力を持っており、子どもの思いを世の中に放出することで、大人が見失いがちな「やさしさ」があらゆるものに加えられていくのではないかと思います。

さて、次のような図を街角で見ることもあるかと思ひます。



持続可能な開発目標SDGsの17の国際目標を掲げたものです。

ユニセフが提唱するCFCI (Child Friendly Cities Initiative) 「子どもにやさしいまちづくり」は、このSDGsの中にも位置付けられています。

CFCIにおいては、子どもも社会の一員として扱われ、市町村の政策などが子どもの為になっているかどうか、そして、子どもたちがまちの活動に参加し、彼らの意見が考慮されているのかが重要になります。

この活動は、世界各国各都市で取り組まれてはいるものの、日本では、まだまだ参加自治体が少ないのが現状のようです。

そのような中、実は「日本型子どもにやさしいまちモデル検証作業参加自治体」に奈良市が参加していることを知りました。

奈良市には、「奈良市子どもにやさしいまち条例」があり、この条例の制定案には、子どもたちも参加し、つくられたとのこと。

昨年10月に開催された「日本型子どもにやさしいまち(CFC)モデル検証作業記念フォーラム」には、仲川市長も参加され委託状が手渡されたそうです。

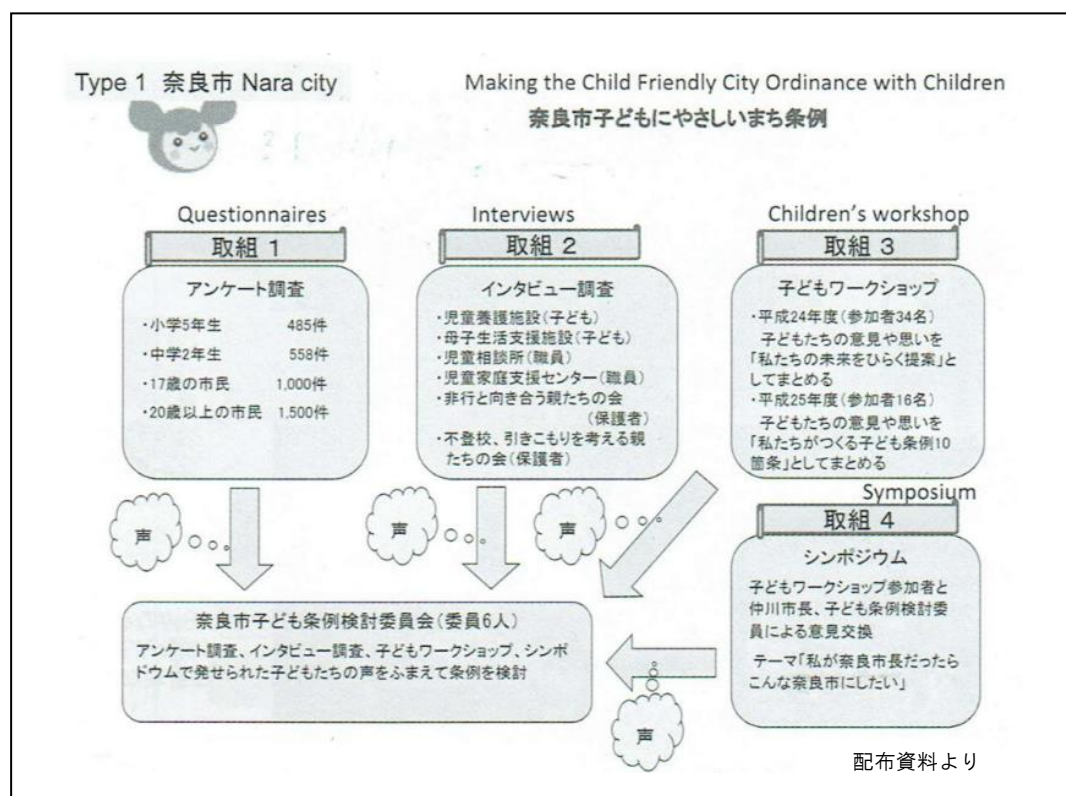
日本では、奈良市を含め、北海道ニセコ町、北海道安平町、宮城県富谷市、東京都町田市など5都市のみの参加ですが、他の国では、多くの自治体に参加し、成果をあげているようです。

フランスでは、200近くの市町村が子どもにやさしいまちを推進し、子ども委員会を設立、出生率増加にも影響を与えたようです。

ドイツのヴォーバン地区では、子どもが問題について意見する場に参加し、環境共生共同住宅が作られたそうです。道路は、子どもの遊び場が優先される「遊び道路」が作られ、団地内には、冒険遊び場、バスケットボール、砂場などが設けられました。こうした取り組みにより、自然と子どもを産み育てたくなる住環境ができていったようです。

また、ドイツでは、補完性原理(決定や自治などができるかぎり小さい単位で行い、できないことのみをより大きな単位の団体で補完していくという概念)にてNPOが市の施策を分担していますが、ミュンヘン市では、これらのNPOが「ミニ・ミュンヘン」という子どもたちだけで運営する仮設都市イベントを夏に3週間だけ開催しており、この運営には、市が予算の半分を支出しているそうです。

その他たくさんの国の市町村で、子どもたちがまちづくりや行政の施策などに参加し、活動の場を広げていっているとのこと。



今回は木下先生の基調講演についての記述だけになりましたが、この後の分科会では、奈良県内の自治会や各地域でつくられた団体、子ども食堂を運営されている方のお話など、小地域での活動や取り組みについてもお聞きすることができ、「福祉」という言葉のとらえ方の枠の大きさを実感いたしました。

改めて「福祉」とは何か？を調べてみると、私が所属している他団体の標語にもなっているのですが、

「ふ」ふだんの「く」くらしを「し」しあわせに・・・
ということで、特定のだれかではなく、みんなが幸せになれるように取り組む仕組みのことと出てきます。

木下先生のお話にもありました、「子どもにやさしいまちはすべての人にやさしい」。

福祉とは、「しあわせ」「やさしい」「すべての人に」がキーワードである事を改めて実感し、今後の活動に活かしていきたいと思いました。

第29回全国女性建築士連絡協議会(東京) 報告 庄田 尚代

令和元年7月13日(土)、14日(日)、第29回全国女性建築士連絡協議会(東京)「未来へつなぐ居住環境づくり」— 和の伝統技術の継承と創造 — が開催されました。会場は日本建築学会建築会館です。奈良からは4名が参加しました。

13日(土)

■ 11:00~12:30 全国女性委員長(部会長)会議



全国女性委員長(部会長)会議の様子

全国46都道府県建築士会女性委員長会議の協議事項は、1) 協議会のアピール案について 2) 第62回全国大会(北海道)の女性委員会セッションについて 3) 第30回全建女(福岡)についてです。次回は、記念すべき30回です。過去10年間の各都道府県の建築士会女性委員会の活動を、A2サイズのポスターにまとめ、展示することになりました。これまでのあゆみを振り返り、未来につながる女性建築士の活動を広く知って頂けるようなものにしたいと思います。先輩方をはじめ、女性会員の皆様、ポスター制作にご協力をお願い致します。

□ 13:30~ 開会式

□ 13:55~ 活動報告(岩手県、秋田県建築士会)

□ 14:30~ 被災地報告 (北海道、福島県、岡山県建築士会)

■ 15:45~ 基調講演

「和の伝統技術の継承と創造
— 新たなプロの育て方 —」

原田 宗亮 氏

(有限会社 原田左官工業所 取締役社長)

■ 16:30~ トークセッション

ゲスト: 金澤 萌 氏 (marumo 工房)

コーディネーター: 石貫 方子 氏

(連合会女性副委員長)

左官と言えば、漆喰塗りが思い浮かびますが、最近是一般の漆喰塗りは減り、コンクリートフェイク仕



講演とトークセッションの様子

上、竹の造形仕上、木片入り仕上というようなものや、コーヒーショップの壁でコーヒー豆を埋める、豆をひいたものを練り込むなどお洒落な仕上施工が増えているそうです。また、従来よりも短期間に職人を育成する技法「モデリング育成」が注目されています。これは、師匠に弟子入りし、背中を見て学ぶ方法ではなく、誰にでもわかる左官の手順の動画を見て、「完コピ」をし、マスターするというもので、1人前になるまで大変な努力と時間がかかるというイメージが覆る興味深いものでした。根っこの部分では「見て覚える」ということは同じです。左官職人は男性ばかりだと思っていたのですが、原田さんの会社には、10名の女性職人さんが在籍されています。原田さんは、建築業界のダイバーシティを推進し、厳しい状況が続く業界を「女性の参入で変える」ことをモットーに、女性が働きやすい職場作りを目指しておられます。トークセッションでは、元原田左官工業所の女性職人で、現在は独立しておられる金澤さんが、様々なエピソードをご紹介くださいました。金澤さんは、子供の頃に観た朝ドラ「天うらら」の主人公が大工職人を目指しながら、パワフルな祖母と負けず嫌いな母と共に理想の家づくり、家族づくりをする姿に影響を受け、入社されたそうです。入社当初は、女性トイレもなく、見積などの事務系の仕事が主だったそうです。左官仕上のサンプルを作成したり、新しいデザインを提案したりすることから始め、次第に実際の左官仕事をさせてもらえるようになったそうです。現在、仕上の新しいアイデアの多くは、彼女のような女性職人から生まれているそうです。修業というものは、時間に制限のないものですが、金澤さんは、自分が関わった仕事に対して（時間に制限がないのは変わりませんが）責任感を持って働き、仕事が終われば

長期の休暇を取るといった働き方を実行されています。左官は、人が現場で塗って仕上げるもので、カスタムメイドのものを作ることができます。そんな左官の仕事を、「とても楽しい!」とおっしゃっていました。

14日(日)

■ 8:50～ 分科会(C分科会) 参加者30名

歴史的建造物と建物再生

コメンテーター：磯田 節子

(熊本県建築士会)

司会：八木 景子(兵庫県建築士会)



C分科会の様子

平成28年4月の熊本地震で被害を受けた宇城市小川町での3年間の復興活動についての報告がありました。江戸末期から明治期の町家が多く残存し、地域経済の中心地であった小川町は、震度6強を2度受けました。町家の土葺き瓦や漆喰壁の崩落は見られましたが、柱梁は、殆ど損傷がなかったそうです。これらの伝統的町家の修復、歴史的町並みをどう活用していくかについて、住民らは、月一回の話し合いを継続されています。その活動の中から、1) 各種専門家不足 2) 公費解体による町並みの損失 3) 構造的判断の難しさ 4) 価値を損なわない修復とは何か 5) 高齢化問題とこれからの経営 について意見交換が行われました。課題は重たいものでしたが、活発な意見交換が行われました。

以上、全建女報告でした。



懇親会(通称：近畿ナイト)の様子

職人さんに聴く!!

今回の職人さんは 瓦葺き職人
石野瓦工業 北浦 佳博 氏



今回は、天理市の石野瓦工業の瓦職人、北浦佳博氏にお話をお聞きます。石野瓦工業さんは、創業元禄6年より古都奈良で育まれた瓦葺きの伝統を継承し、国宝重文級の社寺の修復をはじめ、現代建築、住宅まで幅広く瓦葺きの仕事をされています。北浦さんは、15歳で入社以来、今まで、職長として数多くの仕事に携わってこられました。

— どうして瓦職人になりたいと思われたのですか？

北浦：最初は、瓦職人というよりかは、学校の先輩が働いておられたので、同じ会社に入ろうと思ったのです。

— 瓦葺きの良さはどんなところだと思いますか？

北浦：瓦葺きの建物は、重量感があり、歴史を感じるところです。そして我々が作ったものが、何百年先の未来までずっと「残る仕事」であるということです。

— 瓦はそんなに長く持つのですか？

北浦：1000年前の瓦も健在です。

— こうして拝見するといろいろな瓦があるんですね。

北浦：地域や建物によってさまざまな種類の瓦が使われています。飛鳥瓦、大和瓦、三州瓦、淡路瓦、それらの特性によって使い分けられます。丸瓦と平瓦の組み合わせで構成されていますが、軒先やケラバにも文様を飾った瓦もあります。



平唐草瓦

— 瓦葺きの手順などは、経験と勘によるものなのですか？

北浦：いえ、タイル割付図のような施工図を作成し、確認してから葺きます。

— 今までに施工された中で、一番難しかった現場や印象に残っている建物について教えてください。

北浦：住宅でも社寺でも、どの建物も同じものは一つもないので、その都度、試行錯誤しながら進めています。屋根の形状では「むくり」が糸を張れないため「そり」よりも難しいです。また、国宝級の屋根葺き替え工事は、責任重大で緊張します。

— （出張で）熊本に行っておられたとお聞きしましたが、...

北浦：はい。2016年4月の地震で被害を受けた熊本城大天守の屋根修復に、10か月間行っていました。天守の瓦は落ちて割れてしまいました。その葺き替え工事を担当しました。震災以降、先日10月5日に一般公開されるまで、我々だけが、間近で見ることができました。

— わざわざ奈良から仕事に行かれたのはどうしてでしょうか？熊本にも瓦職人はおられると思いますが？

北浦：城内の他の屋根では、地元の職人さんも沢山仕事をされていました。ただ、天守の特殊な瓦葺きの技術を持っているのは、我々だけだったからだと思います。



熊本城の天守の上で



瓦の割付作業



簷甲（みのこ）の掛瓦取付

— 最近の仕事はどのようなものがありますか？

北浦：奈良では、旧少年刑務所の屋根葺き工事がちょうど完了したところです。また、京都南座の屋根葺き替えも完成しました。屋根部分がライトアップされ、瓦がとても美しく、観ていると、とても誇らしく思います。



京都南座 ライトアップ

— 最近、職人さんが減っているとお聞きしましたが、...

北浦：現在、職人は全員 40 才代以上になりました。今は、なかなか若い人が入ってきません。伝統技術の継承という意味では、危機感を持っています。確かに夏場、瓦は非常に熱くなり、また重く、そして屋根の上は、その照り返しで大変な環境です。ただ、葺き終わった後、お客さんに喜んでいただけたという達成感は、若い人にも味わってほしいです。苦労した甲斐があったなあと思います。

— 設計者に対して、何か要望などがありますか？

北浦：一般住宅の瓦葺き屋根離れが進んでいます。正しい技法で葺かれた屋根は、本来とても強く、地震や雨の被害を受けることはないのですが、少し前の時代によくない施工をされたものがあり、それらの多くが地震や台風の被害を受けたため、瓦葺き＝悪いというイメージが付いてしまい、施工件数が減少しているようです。

今では、瓦標準設計・施工ラインが策定され、健全で安心できる施工を保証します。ぜひ設計に、瓦を取り入れてほしいです。



聴き手：庄田 尚代

がんこ「平野郷屋敷」(旧辻元家住宅)
と重要文化財奥田家住宅 見学会
武市 啓子

日本建築士会連合会女性委員会では、昨年度より全国各地の和の空間を体験し、その魅力を再認識できる建築を紹介する「魅力ある和の空間ガイドブック」をWEB版で公開しています。

近畿建築士会協議会女性委員会では、このガイドブックを活用して近畿2府4県の「魅力ある和の空間見学会 巡行」を行っています。

今回は、大阪府が見学会を担当、まだ暑さの残る9月7日大阪市南部の平野で、がんこ「平野郷屋敷」(旧辻元家住宅)と重要文化財奥田家住宅を見学しました。当日奈良からは、8名総勢23名の参加がありました。

見学地の平野は、中世から環濠自治都市を形成し明治以降は大阪の繊維産業を綿花栽培・綿工業で支えた地域で、豪農豪商の家が多く、戦禍を免れたこともあり古い神社などの建物や町並みが多く残っています。

旧辻元家住宅は、平野郷鞍作(現・大阪市平野区加美鞍作)の豪農辻元家の本宅として江戸時代初期に建設された近世和風建築です。約1100坪の敷地に主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っています。江戸時代より、庄屋、村長等の要職に就き、苗字帯刀を許された豪農でもあります。現在は、和食のチェーン店が購入しレストランとして営業しています。辻元家が所有していた絵画、茶器などが店内及び衣装蔵だった「くらしの博物館」に展示されていました。「伊万里赤絵」や「楽焼」、伊藤若冲の「水鳥」の掛け軸等が展示されていて当時の豪商の財力を垣間見ている気分でした。

庭は、大阪万博で日本庭園を手掛けられた木戸雅光氏が雑木林をイメージして作庭しています。



昼食は、がんこ「平野郷屋敷」で建物の説明を聞きながらいただきました。

次に向かった重要文化財奥田家住宅は、代々鞍安の庄屋を務めた家柄で付近十カ所の庄屋代表でもありました。その敷地は、約半町四方を占める広大なもので、長屋門をくぐると、玉石を敷き詰めた広い前庭が広がり、17世紀の建設と推定される「主屋」を囲み「米蔵」2棟、「乾蔵」「旧綿蔵」「納屋」3棟と合わせて5棟の土蔵があります。

まず長屋門を入ったところで、一瞬前庭の緊張感に目を見張りました。付近一帯の大庄屋としてのどっしりとした造りと、土間入口にある河内木綿の紺のれんの、「〇」に「千」の字をあしらったデザインが力強く風に揺られているさまも気持ちがよかったです。



これから近畿2府4県の「魅力ある和の空間見学会 巡行」で、近畿の町並みを歩く機会が増えることがとても楽しみになりました。

次回は、滋賀県の担当です。

私は「木のある風景」が好きです。

目に飛び込んでくる木立の枝振りや存在感に心を動かされます。仕事の中でも、できるだけ木を感じることができる住まいを造りたいと思い、無垢の材料を使う事や、お庭の計画にシンボルツリーを提案するように心掛けています。

そんな事を考えていると、いつの間にか心地の良い木のある風景を探すようになっていました。散策に出かけた時や、仕事で移動中など、今までに沢山の木に出会ってきましたが、今回は、最近お気に入りの「木のある風景」を紹介したいと思います。



まず一つ目は、京都御苑のクスノキです。烏丸通りから下立売御門に入ってすぐのところにあります。京都御苑の中には、約 280 本のクスノキがあるようですが、このクスノキが私の一番です。御苑内には樹齢でいうともっと古くて大きな木もありますが、高さ 12.3m に対して枝張 28.2m (HP 情報) という、力いっぱい手を広げて立っている風貌を見ているだけで、私はたまらなく癒されるのです。ここ数年、母の闘病で近くの病院へ通った事がきっかけで、御苑に立ち寄る事が多くなりました。母の治療を待つ間、このクスノキの下で考え事をしたり本を読んだり、只々ボーっと眺めて過ごしたり。このクスノキが、暗くなりがちな時間を、穏やかな時間に変えてくれました。100 年以上の時を過ごしてきた大木には、そんな力があるのでしょうか？写真ではゴツゴツした迫力しか伝わらないかもしれませんが、5 月にはとても爽やかな薄黄緑の葉と小さな花をつけ、樟脳のいい香りも振りまいてくれます。

もう一つのお気に入りには、最近という訳ではないですが、以前からよく通る道のケヤキ並木です。場所は、京都市西京区の洛西ニュータウン。街路樹が多く、四季折々に美しい風景が楽しめる場所です。洛西ニュータウン内の街路樹は、道路別に植栽が統一されており、私のお気に入りのケヤキ並木は、新



林本通りというところで 2 km に亘ってケヤキ並木が続きます。洛西ニュータウンの施工が始まったのは 1972 年で、このケヤキ達が植えられたのは 1975 年頃という事で、ほぼ私と同級生なところでまた親近感が湧きました。40 年以上になる木立は、道路の上で手をつないでいるように、ケヤキのトンネルを造っています。写真は歩道から撮影したもので伝わり辛いですが、できれば車で通り抜けて頂くと、どこまでも続くケヤキのトンネルに圧倒されると思います。この道は実家へ帰る際に通る道で、京都縦貫道が開通してからは、通る必要はないのですが、私はこのケヤキ並木が見たくなってわざわざ定期的にこの道を通ります。車で通り抜けるだけの僅かな時間ですが、心がリセットできる感覚になります。以前、この地域で仕事をさせて頂いた事がありますが、お住まいの方もこの並木の事を大切に思っていると仰っていました。広大な竹林を切り開いて開発された場所に人工的に植えられた街路樹で、色々な考え方があると思いますが、その存在が人に癒しを与えている事は間違いなくと思います。また、洛西ニュータウンは計画の基本方針として、完全歩車分離が考えられています。ケヤキによって車道と隔てられた歩道はゆったりとしていて、ケヤキの反対側にはイチョウも植わっており、紅葉の季節には、黄色とオレンジの二重のコラボレーションが楽しめます。

如何だったでしょうか？私の好きな「木のある風景」探しはまだまだ続きそうです。



編集者が選ぶ！

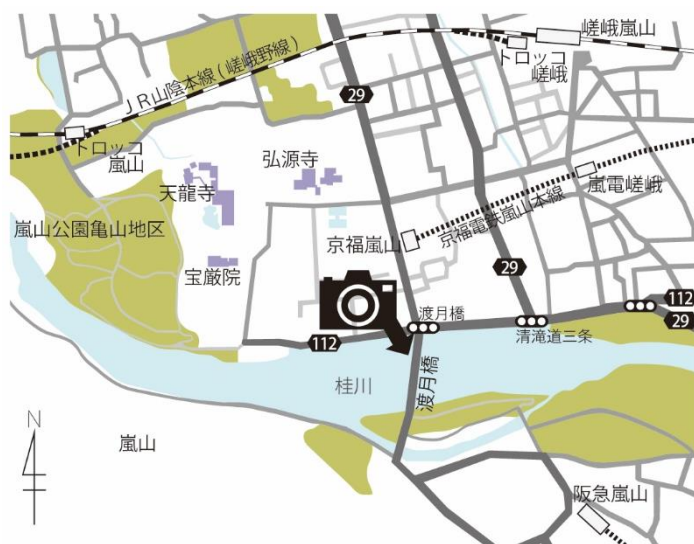
フォトジェニックスポット



嵐山 渡月橋

京都を代表する観光地、嵐山。春夏秋冬、すべての季節において人を惹きつける魅力があり、フォトジェニックという言葉が流行る遥か前から撮影スポットとして人気です。中でもこの渡月橋は嵐山の象徴。鉄筋コンクリート製でありながら、欄干と桁隠しが木で造られ、自然との調和が図られています。

■撮影場所 案内図



住所：京都府京都市右京区嵯峨中ノ島町

今後の事業予定

2019 年

11 月

20 日 (水) 監理技術者講習
第三期建築士定期講習

30 日 (土) 第 38 回近畿建築祭 奈良大会

12 月

7・8 日 (土・日) 空き家の活用に関する研修会
15 日 (日)

11 日 (水) 建築技術者のための技術セミナー

19 日 (木) 監理技術者講習

2020 年

1 月

16 日 (木) 奈良県被災建築物応急危険度判定士
養成講習会

22 日 (水) 監理技術者講習

24 日 (金) 令和二年新年大交歓会
令和元年度臨時総会

2 月

19 日 (水) 監理技術者講習
第四期建築士定期講習

3 月

18 日 (水) 監理技術者講習

フープ第 100 号記念号のお知らせ

次号フープは記念すべき第 100 号となります。1994 年(平成 6 年)の第 1 号発行以来、多くの方々に支えられてきました。ご尽力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

第 100 号記念号は、記念号にふさわしい、より充実したものにしたいと考えています。つきましては、2020 年冬春合併号として、2 月の発行を休止し、5 月の発行とさせていただきます。

皆様とともに 25 年の歩みを紐解いていきたいと思っておりますので、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

広報部 一同

編集後記

寺岡さんにご報告いただいた「第8回なら小地域福祉活動サミット2019」に、私も一緒させていただき、木下 勇先生の講演を拝聴いたしました。寺岡さんの記事の中でも触れていましたが、ドイツのヴォーバン地区にある「遊び道路」の事例を知り、私自身の子ども時代を思い出しました。

私が子どもだった1980年代頃を振り返ってみると、住宅地内の道路で自転車の練習をしたり、ローラースケートをしたり、縄跳びをしたり・・・舗装された道路は、公園とはまた違う遊び場となっていました。「子どもにやさしいまちづくり」が積極的に行われているドイツなどの国に比べ、日本はまだまだ遅れているとのことですが、日本もかつては、少なくとも遊びに関しては、もっと自由で子ども優先だったのではないかと思います。

時は流れ、2010年代。子どもの遊びが危機にさらされている現状を実感する出来事がありました。自宅近くの広場のある公園では、7～8年ほど前まで、子どもたちがキャッチボールをしたり、サッカーボールを蹴ったり・・・活発に遊ぶ姿が見られました。学年問わず一緒に遊ぶ子どもたちの姿はとても微笑ましく、少子化の時代にこんな様子が見られるとは・・・と感動したものです。

ところが、ある時、小学生だった娘が、「もうあの公園、ボールで遊んだらあかんねんて」と残念そうな顔で言うのです。理由は、「公園は幼い子や高齢の方も集う場所であり、危ないから」とのこと。住宅地ができた40年近く前から子どもたちの遊び場であり、幼い子や高齢の方と共存してきたはずです。なのに、なぜ・・・と驚きました。

昔のように、道路も遊び場になるような時代ではありません。せめて公園は子どもたちが自由に遊べる場所であってほしい、違う立場の人たちとの共存を学べる場所であってほしいと願います。

遊び場といえば、河川も私にとってはごく身近な遊び場でした。何回か転居しましたが、どこに住んでも行動範囲の中には河川がありました。散歩したり、走ったり、水の中に入ったり・・・。

先日、台風19号に伴う記録的な大雨の影響により、東日本各地で河川の氾濫が起り、甚大な被害をもたらしました。被災された方々にとっては、日常風景の中にある河川が、あんな風に変えるなんて想像できなかったのではないのでしょうか。

被災された方々が一日も早く平穏な日常生活に戻れるよう、お祈り申し上げます。

(野村 亜希子)

